

覚が必要である。この感覚がうまく働くには、表現が決定的合理性をもっているはず。感覚が作用したくともその余地がなくなるからである。俳句には積極的な姿勢においてつくり出された不決定性の、あいまいな構造がなくてはならない。それが俳句の難解さになるのだが、俳句の美しさは、そういう難解さと表裏をなすものとしてのみ存在を許されているとしても過言ではない。

切れ字の機能の一つは、ことばの論理的関係を切断することによって、不確定性をはっきりさせることにあるとも考えられる。「古池や蛙飛び込む水の音」は、「古池や」とすることによって、たとえば、「古池の蛙……」に比べて、「古池」と「蛙」の関係が非連続的で、超論理的なものになることは否めないであろう。切れ字によって、ことばの流れが中絶させられ、新しい流れに移る。そこに飛躍が意識されるであろうし、脈絡をつけるにあたつての戸惑いも感じられるに違いない。言語表現は平明で誤解の立ち入る余地のないものがよいとする立場からは、不決定性の俳句表現は消極的見方をされるであろうが、芸術が対象、自然のたんなる模写ではなくて、象徴にあると考えるならば、極端に小さな詩型によって、純粹に詩的なものの可能性をぎりぎりまで追究する俳句の超論理的表現は、きわめて高度の芸術性を主張することができる。ヨーロッパにおいて不条理の文学への開眼が認められつつある現在、俳句のもつ美学は再検討に値するものである。不条理文学ではないが、たとえばT・S・エリオットの名詩『荒地』の中に、俳句詩法の

間接的影響を感知することは不可能ではあるまい。われわれは俳句の否定的な面にのみ目を向けてきたのではなからうか。俳句美学の再発見は、われわれ日本人の手によって行ないたいものである。エイゼンシュテインに連句の新しい意義を教えられたというようなことは、もう繰り返したくないものである。

## 解釈の意義

俳句は不確定性の表現であるから、絶対不動の意味などというものを求めることはできない。文学作品において作者の意図を絶対視するのが近代文学の常識であるが、これは俳句には適用できない。もし、適用すれば、俳句のおもしろさはいちじるしく損われることになる。実際問題としては、現在、俳句研究は大体において近代文学の枠の中で、その常識を肯定しつつ進められていくのではないかと思われるが、その結果生まれるものも、やはり一つの異本的解釈であること認識すべきである。決して作者のはじめ意図したものをとらえることはできない。

俳句においては作者自身の作意ですら絶対的權威をもっていない。これはこれまでのべてきたような俳句独特の表現様式が、必然的に不決定性と多元的多義、あいまいさを積極的に容認する美学をつくり上げているからで、その美学の前には作者の意図自体すらも退けられなくてはならない。

作者の意味の絶対性が制約されている俳句においては、表現自体の構造が多義性を誘発するという事情と相俟って、ほかの文芸ジャンル以上に受け手による活発な解釈が行なわれることになる。また、それが必然でもある。諸説が入り乱れて定まるところを知らないということが少なくないが、性急に、正解や定説を求めることは、俳句芸術を貧困化させる。むしろ、諸説をそれぞれに承認して、全体がそのまま原句の解釈であると見るくらいの大らかさが望ましい。音楽にたとえれば、一つの句はヴァイオリンの弦のようなものである。読者によって奏されると、共鳴箱によってそれぞれ異なった音色、音楽を生み出すことができる。解釈という演奏が加えられないと俳句はしばしば沈黙する。

解釈が大きな意義をもっているということは、享受者の理解能力を作者が信頼していることにほかならないが、読者の側に小さな音を増幅して、りっぱな音にする共鳴箱が備わっていないと、俳句は不完全な表現としか感じられなくなるであろう。したがって野暮な読者が嫌われる。その代わり、すぐれた読者の解釈に対して寛大である点では、他に比を見ないと言ってよい。作者の

意図よりも読者の解釈のほうが優先するという例は、古来はなはだ多く、今日においても、句会などでたえず経験されているとおりである。句の添削が、ほかの文芸様式とは違った意味をもつのも、解釈の許容度の高いことを暗示している。

このように、解釈が重要な意義をもつというのも、表現に飛躍・曲折・振れ・もつれ・不確定性などの性格がつよいからで、こうした性格は切れ字などによる断切にともなう空間に根を下ろしていると言ってよい。

## 省略の原理——彫刻的

俳句の本質を考えれば考えるほど、西欧の近代詩との差異がつよく意識される。ヨーロッパの詩において否定されるような、超論理性・空間性・非確定性、あるいは、あいまい性が俳句では静かに肯定されている。西欧において偉大な詩はある程度の長篇であると考えられているのに対して、東洋では大作かならずしも長詩であることを要しない。秀れた短詩の可能性を極限まで追